



巻頭言： 技術士制度に期待する

～ 技術士は全球への扉 ～

工学院大学理事長・JABEE
会長 大橋 秀雄



技術のプロとしての国際通用性を強く意識した技術士法の改訂(2001 施行)、要望が高かった原子力・放射線部門を新設する省令・告示の改正(2004 施行)は、何れも技術士の躍進に大きな契機となりました。これらの審議に携わった技術士審議会/分科会の一員として、ほんとはよかったですと痛感しています。技術士の総数は10年前の3万人台から今や6万人台へ、原子力・放射線部門はゼロから出発して今年は300人を越えるでしょう。その存在感は、社会の中でも、若者に対しても確実に高まっています。

技術士は、単に高い専門能力の証に留まらず、公益確保に対する責務を負っているところに真価があります。自らの良心に従うのは当然ですが、技術士はそれを公に宣誓した立場にあります。技術士は個人に付随する資格ですが、実は組織が社会的責任CSRを果たす骨格になります。揺らぎやすい口先だけのCSRから、責務としてのCSRに高めるのが、少なくとも技術に関する限り、それは組織の中に点在する技術士の役割です。組織人としての技術士の位置づけが今なお不確実なのは、この役割に対する認識が十分行き渡っていないせいでしょう。

その中で、事業の存続自体がPublic Acceptanceに

かかっている原子力・放射線部門では、CSRに対する技術士の役割が一段と重いものになります。部門の技術士数が急激に増えているのは、この認識が特に行き渡っている、いや待望され続けてきた現れなのでしょう。

原子力ルネッサンスという心地よい言葉をたびたび耳にします。化石燃料に頼らないエネルギー源が絶対必要だという信念で歯を食いしばってきましたが、脱炭素社会への流れのなかで再生のチャンスが巡ってきました。原子力・放射線部門にとってのPublicは、domesticを越えてglobal・全球的になります。CSRのSも世界を意味します。そこで全球的視野から公益に責務を負うものが必要になります。日本技術士会が2000年から申請を受け付けている地域資格のAPEC Engineer、昨年からは申請受付を始めた全球資格のIntPEなどは、国境を越えてCSRを担う役割を強く意識すべきでしょう。他国の資格、たとえばアメリカのPEを取得する方も多く出るでしょうが、全球資格もぜひ視野に入れて下さい。技術士が、全球への扉を開きます。